

逝く夏

湿った南風が雨戸を揺らす
懐かしい音
古くなった我が家を
労わるかのごとく撫でてゆく

眠りと
夜の闇との間を往復しながら
次第に
幼児のように身軽になってゆく

網戸を風が通り抜ける
こすれるような
ふるえるような
音

初めて
死を意識した
朗らかで
夢のような――

いつの間にか
逝く夏とともに
「わたし」はもう溶けてしまった
跡形もなく

(2012.8.14)